

近代における数字による涙の修辞

羅工洙*
gsna@ynu.ac.kr

<目次>

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1. はじめに | 3. 「千・万」を伴う表現 |
| 2. 数字「一」と少数を表す数字の場合 | 4. おわりに |
| 2.1 比較的多用されるもの | |
| 2.2 多用されないもの | |

主題語: 数字(numbers)、近代の涙(Tears of Modern)、涙の文學(Tears of the literature)、修辞(Rhetoric)、誇張(Exaggeration)

1. はじめに

日本人は、涙の少ない民族であると言われているが、例えば阪神大震災や東日本大震災で大きな被害者が出ていたにも関わらず、被害者の家族が意外と淡々としていて涙を流していない様子を数多くみてきた。日本はどうやら悲しい涙を流すとか、痛哭するような様子が見られない国のように思われる。これが韓国なら大声で痛哭する様子を見せていたに違いない。

日本人が涙をあまり見せない現象は、古くからあったわけではないようである。世良正利は「日本人の表情」¹⁾のなかで、柳田国男の『涕泣史談』²⁾を引用し「老若男女を通じて総体に泣声の少なくなって来た時代」と述べている。この『涕泣史談』の内容は、1941年の講演をもとにしたもので、それ以前には泣く様子が多く見られたが、その頃には泣かなくなった日本人について記述している。世良はこのような変化の原因を要約して、「表現手段としての言語・非言語のほか、氏はもうひとつ、泣くことの悉くを人間の不幸の表示とみるに

* 嶺南大學校 日語日文學科 副教授

1) 世良正利(1970)「日本人の表情」『日本人の性格』現代心理学シリーズ2、朝倉書店、p.37

2) 『涕泣史談』は筑摩書房から1962年に刊行され、『定本 柳田国男集』第7巻に収められている。

至った変遷の問題を指摘する」³⁾と述べている。この時代には、もう泣くこと自体が不幸のシンボルになっていたことになる。社会的にそう決まってしまうと、不祥事があっても却って泣くことはおかしくなってしまうだろう。

そこで本稿では、近代の人がどういう涙を流したのかを見ていきたい。たしかに、日本の近代文学作品を読んでいると、「涙」と関連した表現が数多く見られる。勿論、あらゆる作品に涙が出現するわけではないが、特に明治期の前半の作品にはその用例が実に多い。柳田が『涕泣史談』を発表した時期と少々離れているし、実生活と文学とを比較して纏めることは理不尽でもあるが、以前は涙の表現が豊富で、実際にも涙をたくさん流していたのではないかと思う。のみならず、涙そのものをかなり好んでいた時期であるかのような記述が見られる。筆者が「紅涙」⁴⁾を考察した時にも言及しているが、再言すると、尾崎紅葉は自作の『二人比丘尼色懺悔』(明治22年4月)の「自序」に、「一 此小説は涙を主眼とす」と明記している。小説を書く目的の一つとして、「涙を主眼とす」と公然と序文の中に入れていくくらいであるから、文学作品での「涙」の効果はかなりあったように思われる。続いて巖谷小波も、尾崎紅葉の手法を真似て似たような表現を用いている。『妹脊貝』(明治22年8月)に「第一条此の小説も涙を以て主眼とす。不用涙あるものは泣いてやる可き事」と記している。「此の小説も」とあることから、尾崎のものを模倣しているらしいことが窺える。先稿では取り上げていなかったが、饗庭篁村や内田魯庵も尾崎紅葉の「涙を主眼とす」という記事に関心を寄せている。

一 此小説は涙を主眼とす(偕大膽に名乗かけたり)

(『掘出し物』饗庭篁村、明治22年5月、明文全26、p.91)

終に金港堂にて出板する事になりしなり友人三華氏より「此製本は涙を以て主眼とす」と新著百種の作者曰くをかりてわざわざ贈られし(『当世商人気質』饗庭篁村、明治22年10月、明文全26、p.33)

新著百種の先達紅葉山人＝涙を以て主眼とす＝と断はられて以来一般の読者は新著百種ならで涙百種ならんなど罵り、次の號の涙は如何にと眼科学の講義を聞く心地もせしが、是も涙上戸の「色懺悔」に初まり悔し涙の「風流佛」に到るまで涙に二ツの文字はなけれど誠の涙と覚ゆるはなし。此「残菊」一是や誠の涙ならんか、いと可愛の我子を残して良人の留守に迷土へ旅立せ

3) 注1)の pp.37-38

4) 羅工洙(2011)「近代における『紅涙』について」『日本近代学研究』30、韓国日本近代学会、pp.5-6

んとするなれば此上の悲しき事あるとは思へず、是に泣かぬ者あらば是れこそは鬼か蛇か、よもや人間にてはあるまじ。涙主眼の小説爰に到つて其实を顕はす。柳浪子又エライ哉^{かな}。

(「柳浪子の『残菊』」内田魯庵、明治22年11月、明文全24、p.153)

内田魯庵はさらに広津柳浪の『残菊』まで「涙主眼」であることを批評している。このように淡々と涙について語っていることから、明治期の人にとっては涙も主要な文学作品の素材であったと思われる。

明治期の涙はどのような涙だったのかを調べるのも、その時代像を反映するという意味で考察の意義がある。涙と関連した表現は実に様々であるので、一つの方向性を決めて考察するのが有益であろう。そこで本稿では、数字による涙の修飾にはどのようなものがあるのかを考察してみたい。涙に関する一般的な表現は「～涙を流す・～涙を呑む・～涙に暮れる」のように、特別な形容のない表現で終わってしまう例が大部分ではあるが、たとえば「～の眼から一滴の涙が落ちた」のように、「一滴」という具体的にどれぐらいの涙を流しているのかの数字を伴う表現も多数ある。先行研究には「涙」とオノマトペとの関係の研究はあるが、数字と涙との関連を結び付けた論文はなく⁵⁾、それを踏まえての研究ができないので、とりあえず近代における状況を調べてみたい。また、近代だけの資料を対象にすると、その変遷などが明確ではないので、近世の読本(曲亭馬琴の作、他)資料をも引用していきたい。これを研究することにより、古代や現代における、「涙」の表現としての変化を知るうえでの一つの礎になるとと思われる。

2. 数字「一」と少量を表す数字の場合

数字「一」は色々の意味が与えられているが、量的な意味をあらわす場合は、周知の通り

-
- 5) 中村明の『感情表現辞典』(1993、東京堂出版)にも数字と関連する用例がない。
佐藤 享(1981)「『泣く』の副詞的表現と歴史」『新潟大学国文学会誌』第24号、pp.20-41
中里理子(2004)「『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—」『上越教育大学研究紀要』第24巻、第1号、pp.304-316
- 6) 近代の作品をもとにした資料は実に多い。例えば『明治文學全集』をはじめ、『漱石全集』、『逍遙撰集』など多くの個人全集をもとにしている。そのため、一々読んだ作品を列挙すると限りがない。のみならず、読んだ作品すべてに用例があるわけではないので、ここでは資料の明記はせず、ただ多くの資料から得た一つの傾向であるということについて了解を得たいと思う。

「わずか」の意味になる。「涙」の表現に「一(いち・ひと)」が入っていれば、だれもが想像がつくように、疑い無く量の少ない様子が感じ取れる。但し、数字は単独で用いられるよりは量詞とつながって「涙」を修飾する形をとっているのも、それにより当然意味も異なってくる。それで、必ずしも少量を表すだけであるとは限らない。では、「一」を同伴する例には、どういうものがあるのかを具体的に見てみよう。数字による涙の表現は多種多様であり、考察する上で支離滅裂の感もあるが、表現の多様性を把握するため一々見ることにする。辞書の説明は『日本国語大辞典』(以下『日国大』と表記)『漢和大辞典』を参考にした。数字「一」と少量に関連しては、「多用されるもの」「多用されないもの」に大別する。

2.1 比較的多用されるもの

近代を通して一番用例が多いのは、「一杯」と「一滴」、「一零」である。また「一行」も多用されている。ここで多用されているといってもあくまで相対的ではあるが、「数字表現」として夥しく用いられているという意味ではない。まず「一杯」(87例)についてみよう。

お鈴は一生懸命といふ顔で目に一杯涙を溜め、三朗の顔を見詰めながら
(『薄命のすずこ』嵯峨の野おむろ、明治21年、明文全17、p.254)

敏子は僅かに瞳子を転じて女醫士の顔を仰ぐ、目の中は一杯にウルミ玉を結びてこぼれんとす。
(『女子参政蜚中楼』広津柳浪、明治22年、明文全19、p.182)

雙の眼には涙が一杯、
(『五月鯉』巖谷小波、明治21年、明文全20、p.198)

顔色は心配で蒼ざめ、眼には一杯の涙を浮べつつ、少尉を慰安してみた。其のいぢらしき看護
彼は眼眶に哀れな露を一杯に溜めてゐる。(『狭足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p.160)

さう思ふともう嬉涙が眼の中一ぱいになつて駒代はどうすることも、
(『腕くらべ』永井荷風、大正5年8月、荷風全集6巻、p.237)

◆眠と其面を見上た眼の中には一杯涙が溢えられて居た。
(『薄衣』永井荷風明治42年3月、明文全73、p.19)

◆優しい房江の眼にはもう一杯の涙が漲つて居ました。
(『乳姉妹』菊池幽芳、明治36年8月、明文全93、p.144)

●健気な辞立かめ振して目の中に涙一ぱい含みしを見る

(『春雨文庫』松村春輔、明治9年、明文全1、p.312)

●覚へず今吉里へ顔を見合せると、涙一杯の眼で怨めしさうに

(『今戸心中』広津柳浪、明治29年、明文全19、p.5)

■睫には涙を一杯にためて、浮田の顔をキツト見詰め、

(『女子参政蜚中楼』広津柳浪、明治22年、明文全19、p.158)

■長い睫には涙が一杯漲つて居る、 (『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.30)

「一杯の涙」は、近代における涙の代表的な表現であるといっているほど、一般的に多く用いられている。しかし、管見では、現在のところ読本の資料では見つかっていない。「一杯の涙」の用例は多くあるが、上の例のみを提示しその他は省略することにする。

「一杯」には、副詞的用法としての「十分満ちている・できるかぎり、ありったけ」の意味と、接尾詞の用法としての「そのものの限度まで全部、限度ぎりぎり」の意味がある。やはり大部分は「副詞的」用法で、「眼には一杯の涙」のような形式を取っているのが特徴である。例外として、■のような「睫」の例が広津柳浪と木下尚江の作品に2例ある。つまり、大部分は眼の中に満ちている涙の様子を表す時に用いられているが、たまに溢れて睫にまで漲ったとでもいえようか。では、「一杯」の涙の量はどれぐらいなのだろうか。当然人によって異なるだろうが、「一杯の涙」だけを見ては少々分かりにくい。これは涙に後続する動詞がどういう意味を持っているかによって分かるようになる。◆の例のように「溢れる・漲る」の動詞になると、例えば「浮かべる・溜める・なる」などが、ただ眼の中に涙が満ちていることを表すこととは違い、もっと涙が充満しているように思われる。

なお、「一杯」の接尾詞的用法はあまりないが、●のように「涙一杯」の例がある。「一杯の涙」と別段解釈の上で差はないように思われる。ただ接尾詞的用法には、ある場所における「限度ぎりぎり」とか「すっかり」の意味合いがあり、「涙一杯」の場合には「眼」という空間に涙がすっかり満ちている様子を表すことから、接尾詞的用法の方が少々涙が多いような感じがする。

ところで、「一杯」の「杯」の問題は、他の数字を伴わないことである。それ自体が副詞の意味を持っているので、「二杯の涙・三杯の涙」や接尾詞的な「涙二杯・涙三杯」などの表現は用いられていない。したがって、以下取り上げる用例とは性格が異なるものであるといえよう。

この故に今その死に及びて、われ一滴の涙を見せず。 (『南総里見八犬伝』1冊、p.245)

心中しんちゆうに無量むりやうの憂苦いうくありといへども、涙一滴なみだ てきおとさず、 (『復讐奇談榊枝鳥』滝沢馬琴集6巻、p.220)

その妻すて早く已すでにその意の苦きしむ所を窺き察さつし、手てに巾櫛きんしつを執とり、その背後きんしつに立つ。紅涙一滴べになみだ稲いなの面おもて上に灑そそぐ。 (『西京伝新記』菊池三溪、明治7年12月、新日本古典文学大系明治編1、p.303)

寤おぼえずホロリと一滴いつてきの涙なみだを翻こぼす其折そのわりから思おもひ掛がけなき後うしろより~ (『金之助の話説』前田香雪、明治11年8月、明文全2、p.138)

清盛つかは手てを支たへた。我われは知らぬが一滴いつてきほろり、涙なみだが床したへ滴たつた。 (『平清盛』山田美妙、明治43年12月、明文全23、p.102)

思おもはず落おとす一滴ひとしづく涙なみだを拭ぬぐふその折そのわり柄へら~ (『巷説二葉松』宇田川文海、明治17年1月、明文全2、p.260)

今いまは慷慨こうがいする者ものを要えうするの日ひなるに彼等かれらは笑談しょうだんすれども一滴いつてきの涙なみだはあらず、 (『當世文学の潮模様』北村透谷、明治23年1月、明文全29、p.62)

われも昔このやうは此様なまははにと、亡母なまははを懷なふ涙一滴なみだ、ぼろりと落ちてわつと泣なく道子みちこを、 (『小説黒潮』徳富蘆花、明治34年、明文全42、p.39)

「一滴の涙」であれ、「涙一滴」であれ、涙の表現にはこのタイプもかなり多い。「一滴」(112例)の意味は、文字通り「ひとしづく」である。「一滴」は音読み(いつてき)でも訓読み(ひとしづく)でも読める。「しづく」の意味であるので、量的にいえば最小限度の涙であろう。否定表現をみると「一滴の涙へず」となっていて、最小限度の涙も流さないという全面的な否定表現になっている。否定表現は「一杯の涙」には見られない。この「一滴の涙」の表現は近世の読本にも用いられているし、近代にも全般的に用いられていて典型的な涙の表現といえる。しかし、「滴」が持つ根本的な意味から、誇張的な意味合いは含まれていないと思われる。おもしろいのは、「滴」とつながる数字が「一」だけでなく「二滴・両滴・三滴」の表現も見られることである。

露しづくか涙なみだか二滴ふたしづく病あをにこけて蒼ほほざめた頬あたまを流れ下るを、我そむに見せじと頭あたまを反けたので、 (『椿姫』長田秋壽、明治36年、明文全7、p.288)

私くわの過去この罪せんれいの洗かんしや礼ふたしづくの如ひたいく、感謝かんしやの涙なみだ二滴ふたしづくはらはらと額ひたいに御ごそそぎ被ひ下候くだり。 (『椿姫』長田秋壽、明治36年、明文全7、p.363)

點てんでん々と紙かみに声こゑあり。霰あられなす男おとこの涙なみだ二滴ふたしづく。 (『椿姫』長田秋壽、明治36年、明文全7、p.281)

自分は彼の手を把つて、之を唇へ持つて来た途端涙二滴我にもあらず其上に零れた。

(『椿姫』長田秋壽、明治36年、明文全7、p.304)

お兼は其前から泣いて居たのか、槌野の手の甲に二滴三滴涙が墮ちた。

(『八幡の狂女』広津柳浪、明治34年、明文全19、p.311)

けれども一人ぼつちになると大粒の涙を二滴ぼたぼたと頬に傳はらした。

(『戦塵』内田魯庵、明治40年2月、内田魯庵全集13、p.43)

知らず識らず両三滴の涙を垂たり。(『可憐鷹』湖處子訳、明治25年5月、明治翻訳文学全集50、p.85)

読本には見られず、管見では上の例しか見つからなかったが、なぜか「一滴」よりは「二滴」の方がもっと具体的な描写であるかのように見える。「一滴の涙」は、本当に「一滴」のみを流して終わってしまうのだろうか。勿論そういう時もあるが、多分に「一滴の涙」とは、ただの「ひとしづく」というよりは一般的に用いられている「涙を流す」の異なる形の表現であるように思われる。これとは違い、涙の量が少々不確かに感じられる「二滴三滴・両三滴」の方が、嘸み締めてみると具体的な表現をしていることが分かる。

この「滴」の表現が多少なりとも不確かなものになるとときには、以下のような表現もしている。

言了テ往事ヲ追想シ数滴ノ紅涙臉頭ニ下ル

(『花柳春話』附録、丹羽純一朗、明治11-13年、『明治初期翻譯選』p.42)

且つ極めて同情に富むが故に読者をして数滴の涙を催さしむる処多し。

(『時文小言』内田魯庵、明治33年1月、明文全24、p.237)

云はぬは云ふにいやまさる、数滴の落涙に萬斛の愛情あらはれけり、

(『うき世』磯貝雲峰、明治22年、明文全32、p.171)

はらはらとして数滴の涙を膝に落した。(『浜子』草村北星、明治35年12月、明文全93、p.34)

数滴の涙は却つて余を美しく見えしめぬ。(『青蘆集』徳富蘆花、明治35年、蘆花全集3、p.468)

其家を望みては暗に幾滴の涙を催すとき如何なる心ちする者なるや

(『尤憶記』森田思軒、明治23年8月、明文全26、p.269)

不確かさを表す表現として「数・幾」が用いられているが、やはり「滴」があるために涙をそれほど多くは流さないことが分かる。数字「一」を用いた表現の中では「一杯の涙・一滴の

涙」が普通用いられているが、それに劣らずよく用いられる表現として「一零」がある。

●流石に猛き清兵衛も涙の雨の一ト零思はずほろりと翻せしが

(『春雨文庫』松村春輔、明治9年、明文全1、p.351)

思はずも膝にホロリと一零、落る涙の氷柱より、

(『嶋田一朗梅雨日記』岡本起泉、明治12年6月、明文全2、p.68)

雪の上にホロホロと降たる一零、(『近江聖人』村井弦齋、明治25年10月、明文全95、p.157)

思はず知らずはらりと一零、杢元へつい振落す。

(『大さかざき』川上眉山、明治28年、明文全20、p.174)

悲しくつて悲しくつて涙が滴れます、と堪へ兼ねけむ膝に落す一零。これは頼もしき

乳母が真実を籠めたる溜涙なり。

(『乳母』『薄氷遺稿』北田薄氷、明治29年5月、『リプリント日本近代文学』、p.308)

覚へず溢す一零、同気相隣れむ女の誠、(『自由艶舌女文章』小室信介、明治17年、明文全5、p.241)

先刻よりの様子と云ひ今の一ト零は何処から出し熱いものぞ、

(『一口劍』幸田露伴、明治23年8月、露伴全集5、p.37)

「零」(51例)は「液体のしたたり落ちる粒状のもの。点滴」の意味を持っているので、根本的には「滴」と意味の上でかわりはない。●の「涙の雨」のように、夥しい量の涙が思い浮かぶにもかかわらず「一零」とつながっているために少々おかしいように思われる例もある。しかし、一般的には「ひとしづく」そのものであり、場合によっては「一滴」と同様、涙を流すという表現の一つとして用いられることもあるのだと思われる。そういう面ではあまり具体的ではなく、漠然とした感じがする。この「一零」も多用されているが、もっぱら「ひとしづく・ひとしづく」のように訓読みである。読本の例はまだ見つかっておらず、特に明治期に活性化した表現の一つであると思われる。

「一零」があれば、それ以外の「零」もあるはずである。

万歳がとまると共に胸の中に名状しがたい波動が込み上げて来て、両眼から二零ばかり涙が

お落ちた。

(『趣味の遺伝』岩波文庫、p.184)

清子の顔を見るその静子の眼から、美しい涙が一雫二雫頬に伝った。

(『鳥影』石川啄木、明治41年11月、啄木全集3巻、p.295)

お光は愈よ悲しさの遣る方涙幾雫量に痕を印しけり

(『春寒雪解月』斎藤緑雨、明治21年1月、斎藤緑雨全集5、p.270)

「二雫・ふたしづく」は現在ところ2例、「幾雫・いくしづく」は1例見られたが、前者の場合は「二滴の涙」で見たように、多少なりとも具体的に涙の量が分かるような表現になっている。このことから、少量の涙を流すことを表すときには漠然とした感じのする数字「一」の方が代表的なものになっているといえる。しかし、「行」の例になると状況が変わってくる。

両行の涙泉のごとくに流し、嗚咽てぞ哭ける。

(『復讐奇談七里濱』一溪庵主人、文化5年、『中型本読本集』p.239)

松井の眼からは、大きな涙が二三行だらだと落ちた。

(『明治の天下』人見一太郎、明治26年2月、明文全36、p.209)

雄々しき性質も有繋は婦人、双行の涙を拭ひ、(『鬼啾啾』宮崎夢柳、明治17年、明文全5、p.102)

愁涙禁むる由もなく。澹然として雙行の。襟を浸すを知らざりしは。

(『慨世士伝』坪内逍遙、明治18年2月、逍遙撰集別冊2、p.496)

此法ハ所謂両行ノ清涙能ク既去ノ春ヲ生シ一轉ノ秋波騒人ノ魄ヲ奪フニ足ル

(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年、p.254)

屹と表の方を睨めしが懸て堪へ兼てハラハラと落す両行の涙、側に在りし下女は餘所事と念

はず (『近江聖人』村井弦齋、明治25年10月、明文全95、p.147)

涙を流すことを表す表現が「行」になると、今まで取り上げた例とは違い、もっと激しい様子になっている。不思議なことに「杯・滴・雫」では「一滴・一雫」のように、両眼があっても「一」を使う場合が圧倒的に多かったが、「行」の場合は「一行の涙」が見られない。勿論、普通涙が出ると両頬に伝わって落ちるのが当然であろう。そういうわけか、基本的に「両行の涙」が用いられており、近世に3例、近代に6例ある。その他にも「二行三行」が1例、「双行」も2例見られる。しかし、こういった用例は案外少なく、「数行の涙」が比較的多

く用いられている。

みなみなすうこう なみだ のこりをし いでさり
衆皆数行の涙にかきくれ。遺憾げに出去けり。

(『椿説弓張月』初巻、滝沢馬琴、文化4年—8年、岩波文庫、p.200)

す かう なみだやつ たもと ひた しうしやうとき
数行の涙八の袂を浚して愁傷説つくすべからず

(『復讐奇談七里濱』一溪庵主人、文化5年、『中型本読本集』、p.243)1例

おさや是を聞て数行の涙にかきくれ、さてはと無念の齒を

(『復仇女実語教』十返舎一九、文化6年、『中型本読集』、p.360)1例

ワカレ ノゾ ス カウ コウルイケンカイ アフ
別ニ臨ンデ数行ノ紅涙硯海ニ溢ル

(『花柳春話』三編、丹羽純一郎、明治11-13年、『明治初期翻訳選』、p.63)

且つ自から涙数行下る。 (「十年前の田園生活」国木田独歩、明治29年夏、明文全66、p.303)

此夕独り先生病中の小照に対して坐する者多時、涙覚へず数行下る。

(『兆民先生』幸徳秋水、明治35年5月、明文全84、p.100)

夫婦ノ膝下ニ伏シ涙数行雨ノ如シト雖トモ

(『西洋探検』加藤政之助、明治12年7月、『リプリント日本近代文学』、p.214)

女学士の目からは数行の涙が落ちて、

(『玉を懷いて罪あり』森鷗外、明治22年3月、鷗外全集1巻、p.150)

「両行の涙」の場合にはかなり具体的なイメージが思い浮かぶ。一方、「数行の涙(涙数行)」になると、前者よりもっと激しい様子であり、少々誇張された表現でもある。しかし、はたしてどれぐらいの涙を流しているのかは定かではない。現在のところ管見では「数行の涙」の表現が読本に5例、近代に13例見られる。また、「数行」があれば、「幾行」もある。

長き叙事詩の四分の一を誦誦せしめんとせしかば、幾行の涙、幾下の鞭か、

(『即興詩人』森鷗外、明治25年11月、明文全27、p.182)

はつと思ふか、思はぬに、はや先立ちし、涙の幾行。

(『したゆく水』清水紫琴、明治31年2月、明文全81、p.91)

幾行の涙と共に柩をニースに移して此処に正式の葬儀を営みたり。

(『名婦鑑』徳富蘆花、明治31年4月、蘆花全集5、p.365)

僕は幾行の涙と共に手紙を認めた。（『思出の記』徳富蘆花、明治34年5月、蘆花全集6、p.199）

胸の闇晴れぬ思ひの幾くだり落つるは涙乱るるは鬢のおくれ毛~

（『春寒雪解月』斎藤緑雨、明治21年1月、斎藤緑雨全集5、p.293）

上の「数行の涙」と同様に涙の量が不確かな用法であり、意味の上で差はない。用例は4例しか見つかっておらず、それほど一般化していない表現である。「行」は「こう」と大部分音読みになっているが、斎藤緑雨の例のような「幾くだり」の訓読みは「すじ」や「行」の部類に入るだろう。

以上、「一杯の涙」は性格が異なるけれども多用していること、「滴」の場合は「一」とつながる例が多いこと、「零」の場合も「一」とつながるが殆んどが訓読みであること、「行」の場合は逆に「一」とつながる例がなく、少量を表す場合に多様な用いられ方があることが分かった。

2.2 多用されないもの

「数字」とつながる涙の表現は実に多い。次は、数字「一」とそれに近い少量を表す数字とつながる涙の表現の中で、多用されていない例をみることにする。用例数を提示していない場合は、引用例が全てであることを表す。まず、「一掬」の例を見てみよう。

言終つて一掬の紅涙自家の膝上に向ひ滴々として揮ひ来る。

（『柳橋新誌』二編、成島柳北、明治7年2月、明文全4、p.24）

此の天日を拜せしめしは最と有り難き所為にぞあると、一掬の感涙を拭ひ了り、

（『自由の凱歌』宮崎夢柳、明治15年、名文全5、p.60）

永ク妾ノ良友タレヨト説キ了ツテ、一掬ノ紅涙膝ニ滴リ、人ヲシテ覺ヘズ感情ニ咽バシム。

（『泰西活劇春窓綺話』服部誠一、明治17年、『明治文化全集』22、p.485）

君が若し細君一掬の紅涙に折れたなら我輩敢て申包胥となつて哭声天を貫いて見せる。

（『くれの二八日』内田魯庵、明治31年3月、明文全24、p.36）

雪江さんは言茲に至つて感に堪へざるものごとく、潸然として一掬の涙を紫の袴の上に落した。

（『吾輩は猫である』明治38年、岩波書店、p.426）

私の罪に一掬の涙をお持ちなすつちや下さいませんか。

(『春光』徳田秋声、明治41年10月、明文全68、p.139)

まず、「一掬の涙」の例を見るに先立ち「掬」が持つ意味を把握する必要がある。辞書的な意味としての「一掬」は、日本国語大辞典によれば「[名] (「掬」は水などを手のひらですくう意) ひとすくい。ひとにぎり。また、ひとすくいの量で、わずかなこと」となっている。「一掬の涙」は「少しの涙、わずかな涙」の意となるわけだが、『柳橋新誌』(二)の例が初出となっている。はたして「一掬の涙」が量的「の意のか少な意のかも問題である。「ひとすくい」ほど流そうとしたら、かなり泣くひととと q ひとだろう。普通の状況なら大量になるだろうが、大海のなかでのひとすきいだったら、辞書の意味そのままになると思われる。どの観点から見るかによって量が変わってくる少々曖昧なる。でもある。この「一掬の涙」は近世の読本には例が見られず、辞書にあるとおり『柳橋新誌』から見られるので、この表現は比較的新しい表現といえようか。「一掬」とつながる例には、他に次のようなものがある。

「一掬の涙」(『病骨録』尾崎紅葉、明治37年、明文全18、p.345)、(『両口一舌』齋藤緑雨、明治33年1月、明文全28、p.381)、(『清見瀉の一夏』姉崎嘲風、明治35年8月、明文全40、p.250)、(『第二軍従征日記』田山花袋、明治38年1月、明文全67、p.267)、(『人道之戦士』正岡藝場、明治35年1月、明文全84、p.182)、(『日記断片』尾崎紅葉、明治36年3月、紅葉全集11、p.371)、(『金剛杵』齋藤緑雨、明治29年1月、齋藤緑雨全集2、p.172)

「一掬同情の涙」(『同情録』児玉花外、明治37年2月、明文全83、p.331)

「一掬の別涙」(『乱雲驚濤』赤羽巖穴、明治39年、明文全84、p.347)

「一掬の紅涙」(『くれの二八日』内田魯庵、明治34年3月、岩波文庫、p.93)

「一掬」はまた、「空気・塵・微笑」にもつながっている。用例はそう多くないが、新用法として注目すべきものである。「一掬」の場合は、別の数字を用いた「二掬の涙・両掬・数掬」のような例がないことも一つの特徴である。次は、「一滴」と似ている「一点」について見よう。

只ダ一点ノ紅涙滴テアリスノ頬頭ニ下ル

(『花柳春話』四編、丹羽純一朗、明治11-13年、『明治初期翻譯選』、p.108)

今日もし私が洲崎の水楼に上つて夜半の絃歌を聴き、端無く一点の暗涙を落し得たとするなら

ば、 (『冷笑』永井荷風、明治42年12月、明文全73、p.203)

鏡花自らもまた其作中の人物に向つて一點同情の涙をそそがざるなり、

(『嶺雲搖曳』田岡嶺雲、明治32年3月、明文全83、p.73)

先生屢々寄せらるるの書簡、一點の涙痕あるを見ずして、

(『兆民先生』幸徳秋水、明治35年5月、明文全84、p.115)

去れど肚皮下に一點の血も涙も無き無情漢にあらざれば〜

(『薩の海軍・長の陸軍』鶴崎鷺城、明治44年11月、明文全92、p.136)

図らず一點の暗涙を落し得たとするならば、(『冷笑』永井荷風、明治43年2月、荷風全集4、p.295)

『日国大』によれば、「一点」には「ただ一つの点。また一つの点状のもの。転じて、ごくわずかなこと」の意味もあり、「ひとしづく、一滴」の意味もある。この語は日本で古い時代から用いられてきたし、色々の語とつながっていてその用例も豊富である。しかし、「涙」とつながる「一点の涙」の例は辞書に載せられていないので、いつから用いられていたのかは分からない。現在まで調査した限りでは、近世の読本には例がなく、明治期の作品に少々見られる程度であり、稀な例と思われる。「一点の涙」は、眼から一つの点のみの涙を流していることを表すので、ほんの少しの涙、それこそ「一滴の涙」を流していることの形容である。つまり、ここにも誇張的な表現はないわけである。否定の語を伴う時にも、「一滴」の用法と意味のうえで大した差はない。「数・幾」などがついて量的に不確かなことを表す例もあまりないように思われる。

胸の思ひは彌増して名刺の上にはいつしか数點の涙痕—

(『露子姫』石橋忍月、明治22年11月、明文全23、p.234)

「涙痕」となっているので、表現時において涙を流している様子ではなく、「多涙」でもない。次は涙そのものである「一涙」を見てみよう。

一言一涙鳥咽歎、終ニ顔ヲ掩フテ附シ、 (『情海波瀾』戸田欣堂、明治13年、明文全5、p.6)

云ふさへ悲憤の一語一涙、兼て残忍苛酷なるバスチールとは知り居しものの、

(『自由の凱歌』宮崎夢柳、明治15年、明文全5、p.60)

古を語り今を墓なみあふといふ脚色。一字一涙の大著作即ち是と。

(『二人比丘尼色懺悔』尾崎紅葉、明治22年、明文全18、p.3)

紅葉山人こうようさんじんの來臨ナンド本を読んだツて鉛が銀になるものそれか夫より小説を盛さかに書玉へドウダ一字
 一涙といふ僕わがの此の二人比丘尼は〜 (『掘出し物』饗庭篁村、明治22年5月、明文全26、p.91)
 一哀一笑又た一涙して之を記すは、(『柳橋新誌』二編、成島柳北、明治7年2月、明文全4、p.10)
 一字看来リ一涙レ加。(『熱海文藪』、成島柳北、明治17年7月、明文全4、p.68)

先立つ不孝の者かほの面そそに澆ぬがせ給ふ熱鉄ねつてつの一涙いちるみ、あり難き満身に〜
 (『毒朱唇』幸田露伴、明治23年1月、露伴全集1、p.123)

百憂胸あつに攢まり、双涙さうみ臆おそに横よこはり、寐いぬるに夢を結むすばず、
 (『鬼啾啾』宮崎夢柳、明治17年、明文全5、p.117)

「一涙」も用例が大変少ない。「一涙」は用法上独特で、「一語一涙・一言一涙・一字一涙・一哀一涙」のように双をなして格言めいた用い方をしている。つまり、一言であれ、一字であれ、その一つの行為によって一つの涙が落ちるといようなタイプの涙である。また、例えばひとこと言うたびに一回涙を流すといような意味に取れるものもなくはない。一方、幸田露伴の用例である「熱鉄の一涙」はやや奇妙に感じられる。「熱鉄の涙」を流すぐらいだったら、その熱い涙が「一涙」で終わってしまうというよりは、もっと激しい涙が連想するのが普通ではなかろうか。涙量は測れないものの少なくとも「一涙」越える涙を連想させるが、それに釣り合わないように思われる。他に「双涙」が1例見られ、両眼から出る涙であることが分かる。「一涙」があれば「多涙」もある。

然れども貧人の妻として、多涙多恨なる貧詩人の世に容れられず、
 (「石坂ミナ宛書簡」北村透谷、明治21年1月、明文全29、p.307)

那んぞ知らん彼れが全身は多涙多感を以て網羅せることを、
 (『人世の別離』星野天知、明治24年、明文全32、p.139)

ひとたび一度恋の失望より多涙の谷に臨ましめば、其急激奔落する勢またとどひは復止む可きに非ず。
 (『人世の別離』星野天知、明治24年、明文全32、p.142)

多情多涙の詩人は自ら超然として己に適應せず
 (「憂鬱詩人の春愁」姉崎嘲風、明治33年10月、明文全40、p.208)

柔軟多涙の憂鬱的精神の特に愁に堪え難きの時なり。
 (「憂鬱詩人の春愁」姉崎嘲風、明治33年10月、明文全40、p.209)

「多涙」も、現時点ではあまり用例が拾えていない。これも「一涙」が「一〜一〜」の構造で

あったのと同じように、「多涙多恨・多涙多感・多情多涙」のような「多～多～」の構造になっているのが特徴である。その他の用法では、「一涙」と違って自然な用い方をしている。問題は、「多」を用いているが、どれほどの量であるかは全く分からないことである。このときの「多涙」は、「涙の量が多い」ということもあるが「しきりに涙を流す」の意味になっているのではないかと思われる。つまり、「多涙」には一回に流す涙が多量であることもあり、何回も涙を流すタイプもあるということである。このような例は、「一～一～」とともに近世には発達していないようである。次に「～粒」の例を見てみよう。

涙一粒^{つぶこぼ}零しも為^ならないで、泣いた様な事を石に彫^ほり附ける。

(『椿姫』長田秋壽、明治36年、明文全7、p.287)

彼がごとき子は、その父母一粒^{りゅう}の涕^{てい}涙^{ない}にも値^{あた}らずといへりしとなり。

(『西国立志編』中村正直、明治4年7月、講談社学術文庫、p.474)

と一粒^{ひとつせんきん}千金の涙にねりませめて玉はる乳酪^{にうらく}ほどあまき御教訓を、

(『一刹那』幸田露伴、明治22年7月、露伴全集1、p.7)

何事^{なにごと}ぞ此時^{このとき}二粒^{ふたつぶ}の涙の玉^{なみだ たま}が目^めから溢^{あふ}れた。

(『移転』上村清延訳、明治39年7月、明治翻訳文学全集45、p.305)

大変用例が少ないが、「一粒・二粒」の例がある。「粒」から分かるように、「一滴・一点・一涙」と同じく最少の涙である。『大漢和辞典』によれば、「粒」は「こめつぶ」「珠玉・丸薬などの、全てこめつぶ状のものをいふ」となっている。つまり「一涙」そのものの形容である。「一粒」の場合も、否定の語を伴うときには「少しも～ない」のように、全面的な否定になる。

実に感慨^げの堪^{たへ}なく、一^{さう}双^{むせ}の紅涙に咽^{むせ}ばぬ日とてはなかりしが、

(『鬼啾啾』宮崎夢柳、明治17年、明文全5、p.108)

月に花にをりをり触れ来りて一片^{いっぺん}の涙を誘^{いざな}ひ出^いすを以て得たりとなす可きか。

(『苦悶の叫』国木田独歩、明治28年3月、明文全66、p.266)

貴嬢^{ききょう}に捧^{たも}てる報酬^{きんご}は一片^{いっぺん}感謝^{かんしゃ}の涙です、此事^{このこと}に付て僕^{わたくし}の涙源^{なみだげん}尽るまで泣^なて感謝し

ても足^{たら}んのです。(『わらはの思出』福田英子、明治38年12月、明文全84、p.52)

やがて其の固く閉ちたる両眼^{りょうがん}から涙^{なみだ}一条、蒼ざめた頬^ほに流^{なが}れ落^おちた

(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.29)

大きな涙の滴が二條其類を傳つた。(『花園』たそがれ訳、明治36年9月、明治翻訳文学全集50、p.220)

涙は幾条か頬に流れた、(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.143)

上の例は「一双・一片・一条・二条・幾条」の全例であるが、涙の容量が少ないことを表す特異な表現である。「条」は「すじ」と読んでいて「行」の表現と似ている。多用されないもののうち数字「一」を含む語は、「一掬」を除き大変少量の涙を表しているといえよう。しかし、「一」をもって大量の涙を流していることを表す他の表現もなくはない。

涙妹からの縁つづき、其情実の為には啼く。但し国家正義のためにも啼く。天下唯一、関原介といふ多涙の人間、其場合に於ては一升二升惜しまぬ涙も、情実と正義二つながら襲ひかかつて来た場合に於ては、むしろ、否、素より進んで一我慢辛抱堰く!情実の涙は堰かずに居られぬ、(『白玉蘭』山田美妙、明治24年1月、明文全23、p.44)

それにはそれで慾が手傳ひ、嬉し涙一升は口惜し涙百石程にも思はず商人よく言ふ口、(『白玉蘭』山田美妙、明治24年1月、明文全23、p.23)

互ひに顔を見合してゴロゴロ落す涙の水、一升三合ほどなるべし。(『日ぐらし物語』幸田露伴、明治23年4月、露伴全集1、p.350)

眉倒 髪立欲レ言 未レ語一泓紅涙汪汪掉落来(『繁昌後記』、寺門静軒、明治10年11月、東北大学図書館蔵本、19ノオ)

一陣の涙を流し、(『英草紙』近路行者、寛延2、1749年、日本古典文学全集48、p.193)

又もや涙を催して、両の眼の一時雨、四の袖をぞ絞りたる。(『張嬪』服地桜痴、明治27年12月、明治文化全集21、p.346)

はいとばかり袖を顔に押当てて又はらはらと一村雨、(『稲むしろ』齋藤緑雨、明治32年11月、齋藤緑雨全集7、p.295)

鎮守様の大祓ちや、涙の雨が降つて一村洪水だぜ、(『舞の袖』泉鏡花、明治36年4月、鏡花全集7巻、p.453)

又も時雨の一しきり零つる涙のはらはらと、(『自由艶舌女文章』小室案外、明治17年9月、明治文化全集21、p.62)

かのかよ なほ た ある すすりあ あ なかど ひと ほほ たき つた お
 渠女は猶絶えず歩きながら敬獻けて居るので涙は一しきりその両頬を滝のごとく傳へ落ち
 た。 (『散歩』田山花袋訳、明治35年1月、明治翻訳文学全集31、p.218)

まず、「升」の例を見てみよう。「升」の意味は「十合。一斗の十分の一。約1・8リットル」である。実際には「一升の涙」を流せないだろうから、かなり誇張した表現であると言えよう。さらに「二升の涙」もあり、幸田露伴の作品には「一升三合」というやや細かい表現まで使われていて面白い。

『繁昌後記』には「一泓の涙」がある。「泓」は『大漢和辞典』によれば「水が深い」ことや「水たまり」を表しているので、「一泓の涙」も多量の涙であることが窺われる。

近世の『英草紙』には「一陣の涙」がある。『日国大』には「一陣の雨」の項目があり、「風を伴ったりしてひとしきりさっと降って過ぎる雨」との説明がある。意味から見れば「一陣の涙」はかなりおかしい表現になってしまうが、多くの涙を流していることを表す特異な表現である。

他に、服地桜痴や斎藤緑雨の作品には、「一時雨・一村雨・一村洪水」のように激しく涙を流している様子を表現している例が見られる。また、「ひとしきり」もその語感から見て多くの涙を注いでいることが窺えるが、涙の比喻である「時雨・滝」がともに用いられていることから、相当の涙を流している表現であることがわかる。

3. 「千・万」を伴う表現

数字「一」を伴う場合にはそれほど誇張表現はなく、一般的に「涙を流す」という表現の方が多かった。他に「二・両」や不定の「数・幾」などが用いられていた。ならば、「五・十」などの例もありうるはずなのだが全く見当たらない。「百」の場合にはわずかに例が見られる。多くの量を表す「千・万」を考察する前に「百」の例を見てみよう。

若し女大学の袖の雫を覚ふる多涙の女性あらば能く百千行の涙を揮ふべけれども氏が所謂「世間通常の人情」を具せざる余輩は氏が哀泣せしを到底信ずる能はざるなり。却て「木曾道中記」に一滴の涙を濺ぎし一節あり、 (『饗庭篁村氏』内田魯庵、明治24年2月、明文全24、p.165)

それにはそれで慾が手傳ひ、嬉し涙一升は口惜し涙百石程にも思はず商人よく言ふ口、

(『白玉蘭』山田美妙、明治24年1月、明文全23、p.23)

曾我二子の面貌を傳へ、幾百石の悲涙や熱涙やを、幾世紀の老若男女からー

(「日本の文学と復讐譚」幸田露伴、大正14年6月、露伴全集別巻下、p.192)

「百」の意味には文字通りの意味もあるが、「あらゆる・すべて」の意味もある。「百千行の涙」、「涙百石」、「幾百石」の例がわずかに見られるが、どれも想像を絶するほどの激しい涙であることを表現している。ここでは、用例が少ないことと、こういう用例があるということだけ指摘することとどめ、次に「千」とつながる表現にはどういうものがあるのかを見てみよう。

泣声憚る千行の、涙は袖に湛たり。(『南総里見八犬伝』2册、曲亭馬琴、岩波文庫、p.83)4例

ここにはじめて千行の涙禁ずることあたはず。(『墨田川梅柳新書』滝沢馬琴集6巻、p.109)

かき拭へどもはふり落る。千行の涙沸かへり。にゑに立んと身を殺し、

(『椿説弓張月』中巻、岩波文庫、p.101)

敢テ妾ノ何人タルヲ告ケサルノミナラス生涯足下ヲ見ルヲ願ハス紅涙千行頓首々々

(『花柳春話』三編、丹羽純一朗、明治11-13年、『明治初期翻譯選』、p.112)

涙痕不学君恩断 拭却 千行更萬行 (『世路日記』菊亭香水、明治17年、明文全2、p.368) 3例

欲向海南問消息 請君試写相思辞

少女聞之喜且泣 千行紅涙筆々濕(『於母影』「鬼界島」森鷗外、明治22年8月、『鷗外全集』19巻、p.35)

一手腕は露程も、あらぬを何とせん行の涙に吐息吻くのみである。

(『縁蓑談』須藤南翠、明治21年、明文全5、p.273) 2例

千行涙沾紅絹袖。

(『佳人之奇遇』東海散士、明治24年、明文全6、p.39)

我眼は千行の涙を流しつ。

(『即興詩人』森鷗外、明治25年11月、明文全27、p.185)

感悦隨に徹し、落涙、千行なりき。(『黒谷の上人』植村正久、明治44年3月、明文全46、p.191)

大尉は碑石に対して千行の熱涙を濺ぎ、暫くは墓畔を立去り得ないのであります。

(『乳姉妹』菊池幽芳、明治36年8月、明文全93、p.240)

今は記念の此一通の「はがき」の上に、僕は抑へ難き千行の涙を洒いだのであつた。

(『思出の記』徳富蘆花、明治34年5月、蘆花全集6、p.383)

実母のこの懐かしさの、千行の涙一筋に親を思ふ孝心から、

(『自由の凱歌』宮崎夢柳、明治15年、明文全5、p.64)

俊三は先づ母の墓前に跪いて、千行の涙と共に一切を懺悔した、

(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.229)

数字「千」を使った代表的な表現として「千行の涙・涙千行」がある。これは近世の読本に7例、近代には32例見られる。「千行の涙」は、近世から受け継がれた表現であるといえよう。近世は音読みの「せんこう」が2例、「ちすぢ」が5例で、訓読みの方が優勢であったが、近代には殆んどが音読みになっている。

「千行の涙」は『日国大』にも項目があり、「幾すじとなくこぼれおちる涙。とめどもなく流れる涙」の意味が与えられていて、鎌倉時代の『源平盛衰記』や『太平記』の例と徳富蘆花の『思出の記』(明治34年)の例が見られる。日本ではかなり早い時期から「千行の涙」を用いていたことが分かる。

基本的に人間が涙を流す場合は「兩行の涙」であろう。「行」は、「くだり」とか「すじ」の意味である。だとしたら、「千行の涙」になってしまうと果たしてどういふ涙の流し方なのか想像しにくい。「百」の例もそうであったが、普通あり得ない、現実性のない涙の修辞である。簡単に言ってしまうと、涙をたくさん流していることの誇張表現そのものである。文学でないといふ虚構がここにあるのである。この「千行の涙」はさらに大げささを加えていく。

ただ 音ならざりし恩愛を、蒙りたりし身にしあれば、幾千行の涙を以て、愁傷悲歎致しても、

(『自由太刀余波鋭峰』坪内雄蔵訳、明治15年、『明治初期翻訳文学選』、p.281)

すべり落るハンケチは、幾千行の涙に湿り、萎垂れて色變れり。

(『細君』坪内逍遙、明治22年1月、逍遙撰集別冊1、p.863)

すべり落るハンケチは、幾千行の涙に濕り、(『細君』二葉亭四迷、明治22年1月、現文全1、p.78)

彼女は千行萬行の涙に良久くは手巾を顔より得も離さなかつたが、

(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.221)

しかのみならず死すとも足らぬ大恥辱を人民に頒ち與ふとは、実に無念千萬涙と鼻水と一緒に流る次第でござる。(『開化問答』小川為治、明治7年3月、明治文化全集24、p.147)

「千行の涙」でも足りず、量の定かではない「幾千行の涙」とし、また「千行」を強調するために「千行万行の涙」と表現している。「千万涙」は「一涙」、「多涙」と同様に「涙」そのものの数であるが、これも誇張された表現の一つであろう。数字「千」を伴った表現には、多用はされないものの大げささの修辭があることを把握した。

さらに、問題になるのは数字「万」とのつながりである。

●^{おくれげ}後髪の一筋^{すぢ}二筋^{すぢ}、^{まぶた}花の如き^め脛^{うち}うるさげにかかり^{こぼ}黒目勝なる星眸の中に、^{こぼ}萬斛の露溢れんとし^{とほやま}顰めたる眉の遠山に愁雲なほほのかなり。

(『めいどの飛脚』坪内逍遙、明治24年12月、逍遙撰集8、p.736)

相争ひ相傷くる者に遭ひては、^{こぼ}萬斛の紅涙を惜しまざる者なり。

(「最後の勝利者は誰ぞ」北村透谷、明治25年5月、明文全29、p.79)

^し斯般^{はんか}可憐^{れん}の嬢子^{ぢやうし}が^{あんとう}暗燈^{もと}の下に^{ばんこく}萬斛^{しゆうらい}の愁涙^{そそ}を^{おお}灑ぐもの多かるべし。

(「二人女」北村透谷、明治25年6月、明文全29、p.178)

^{わづか}僅一夜^{けん}の看病も致さないのが残念でと、^{もだ}声を振はし身^{そそ}を悶えて^{まんごく}灑ぎ尽す^{まんごく}萬斛の涙。

(『若葉』石橋忍月、明治26年1月、明文全23、p.333)

^{ばんこく}萬斛の悲涙^いお流るるが如くに湧き、^{ばんこく}悲痛^{けいしや}惨憺、(「吉田兼好」平田杢木明治26年1月、明文全32、p.248)

^{そのゆうげん}其幽玄なる至境^{しきやう}に向つて^{ばんこく}萬斛^{おつらい}の熱涙^{けいしや}を^き傾瀉^{がいせん}し去つて凱旋^{かいせん}のシイザルに〜

(「マンフッド及びフォースト」北村透谷、明治28年10月、明文全29、p.63)

我輩^{ばんこく}は^{ふる}萬斛の涙^{ばんこく}を揮つて君が更^たに三慮して^た猛然起つ事を熱望するネ。

(『くれの二八日』内田魯庵、明治31年3月、明文全24、p.36)

結婚の晩は感慨^{そそ}胸に迫つて^{そそ}萬斛の嬉し涙^{そそ}を灑いだです。

(『今様厭世男』内田魯庵、明治31年7月、内田魯庵全集9、p.141)

我輩は貴族の淫蕩邪僻を憤ると同時に^{そそ}ゾンケルマンの為に^{そそ}萬斛の涙^{そそ}を灑いだ。

(『うきまくら』内田魯庵、明治31年11月、内田魯庵全集9、p.261)

^{ひそか}窃に^{はかもう}其墓詣^{うやう}でをして^{ばんこく}恭やしく^{そそ}花環^{そそ}を墓上に捧げて^{ばんこく}萬斛^{そそ}の涙^{そそ}を灑ぎ、

(『かた鶉』内田魯庵、明治32年3月、明文全24、p.76)

其裏面には実に^{ばんこく}萬斛の涕涙^{ばんこく}を^{ばんこく}漉ふるを見るなり。

(「曙覽の歌」正岡子規、明治32年3月、明文全53、p.227)

必ず^{ばんこく}眼中^{ばんこく}萬斛の涙あり、^{ばんこく}胸中^{ばんこく}萬斛の血あるものにして始めて得べし、

(『嶺雲揺曳』田岡嶺雲、明治32年3月、明文全83、p.24)

萬斛の熱血と、熱涙とを瀝^{れきじん}し、滴^た尽し、(『嶺雲揺曳』田岡嶺雲、明治32年3月、明文全83、p.30)

捉へ來りて之に満腔の心血と、萬斛の熱涙^{そそ}を濺^{そそ}いで、彼等が為に尽し彼等が為に泣けよ。

(『嶺雲揺曳』田岡嶺雲、明治32年3月、明文全83、p.21)

我輩は萬斛^{ばんこく}の涙^{なみだ}を揮^{ふる}つて君が更に三慮^{りよ}して猛然起つ事を熱望するネ。

(『くれの二八日』内田魯庵、明治34年3月、岩波文庫、p.93)

実に彼が萬斛の血涙^{ちゆうなみだ}を蔵して、凝り得て出來する者に非ずや、

(『兆民先生』幸徳秋水、明治35年5月、明文全84、p.100)

萬斛の涙をそそぐも尚足らざるを覚ゆ、

(『再び犇牛に與ふる書』姉崎朝風、明治35年8月、明文全40、p.231)

先づ枕^{まくら}の邊^へに走り寄つて、我が火と熱き萬斛の涙^{なみだ}を、せめては其の冷き骸^{つがた}に親しく濺^{そそ}ぎ、

(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p.239)

何? 萬斛の涙を注ぐ美人ぢやア～

(『独行』後藤宙外、明治41年12月、明文全65、p.339)

見ぬ恋に憧^{あこが}れ寄る幾百の美人が僕の墓前^{はなごころ}に萬斛の清い涙を注ぐだらう。

(『独行』後藤宙外、明治41年12月、明文全65、p.339)

平民新聞が萬斛の涙^{なみだ}を呑んで將^{まさ}に世を去らんとするに際し、

(『平民の心情』石川三四郎、明治38年1月、明文全84、p.308)

唐氏此の詞を得て、知らず幾斛^{いくこく}の涙^{なみだ}の珠^{たま}を墜^{おと}しけん、

(『幽情記』「幽夢」幸田露伴、大正4年8月、露伴全集6、p.181)

しかも其中には無限^{むげん}の涙^{なみだ}を含んで居る。

(『第二軍從征日記』田山花袋、明治38年1月、明文全67、p.284)

上の例が、現在までに拾った近代における「萬斛の涙」の全例である。数字「一」には「一升の涙」の例があった。その「一升」の十倍が「一斗」であり、「一斗」の十倍が「一斛・一石」である。つまり、「一升」の100倍が「一斛」(180リットル)である。『日国大』には「萬斛」を「一斛の万倍。はかりきれないほどに多い分量をいう。まんごく」となっている。「一斛」の万倍になると、1800キロリットルになってしまう量である。『日国大』における「萬斛の涙」の初出の用例は、北村透谷の「最後の勝利者は誰ぞ」(明治25年5月)である。筆者も「涙」と関連して色々の用例を拾ってみたが、北村透谷の用例より早い例は見つかっていない。このこと

は、近代以前には用いられなかったか、まだ見つかっていないことを意味しているということであり、比較的新しい表現であると思われる。但し、●の坪内逍遙の作品には「万斛の露」の例がある。この「露」は「涙」を喩えたもので、「露」そのものではない。

この「一斛」の万倍にあたる「万斛の涙」は大変な大げささになるだろう。インターネットの検索によれば、昭和年間の先人の言葉を引用した文の中に「万斛の涙」の用例も見られる。のみならず、「万斛の涙」について至大な関心を寄せているものもある。たとえば、次のごとくである

國家の運命を將來に開拓せざるべからず、本大臣は茲に万斛の涙を呑み敢てこの難きを同胞に求めむと欲す

(後略)

昭和廿年八月十四日

内閣総理大臣 男爵鈴木貫太郎

この一節に、「万斛の涙を呑み」という言葉が出ている。「斛」とは石(こく)の意で、十斗の分量。と辞書に出ている。「万斛」は「斛」の一万倍だから、「万斛の涙」という言葉の意味は、十万斗の涙」という意味になる。
(blogs.yahoo.co.jp/jinmoku88/6664756.html)

他にも例を挙げながら、「つまり、実際にどれだけの涙が湧き出るか、それはどうでもよい。要するに、止め処無く涙が出て来る、そのような心情、情緒の昂ぶりの描写である事が分かる。だから現実から離脱する。通常、これを文学的な誇張表現の一種であるとされ、それで好んで使われる」と、かなり鋭い分析をしている。また、李白の「白髮三千丈」を両国の比較の対象として取り上げ、日本における誇張表現の代表的なものであることを述べている。「万斛の涙」の表現は、数字による「涙」の表現のなかで一番大げさな表現であるといえよう。「万斛」には「涙」の他にも、色々の表現がある。

爾が心の悲哀、萬斛の泉、之を酌んで共に泣くものは誰ぞ?

(『富士2』徳富蘆花、大正15年2月、蘆花全集17、p.216)

万斛ノ愁、万斛ノ黄塵、萬斛の深愁、萬斛の慷慨、万斛の憂、萬斛の愛情、萬斛の悲愁、万斛の泉源、萬斛の愛念、萬斛の憂ひ、萬斛の油、万斛の水、萬斛の露光、萬斛の愛、萬斛の愁、萬斛の嘆息、萬斛の泉、萬斛の雨、萬斛の冷汗、萬斛の深愁、萬斛の胸の思、萬斛の同情。

「万斛の+N」の用例もかなりあることが分かる。抽象物であれ具象物であれ、すべてが誇張表現である。当然「万斛の涙」も、涙を流す量が甚だしいことの誇張表現なのである。また「万斛の涙」よりは遥かに量が少ない「幾斛の涙」は、幸田露伴に見られる。他にも、数字では表現できない「無限の涙」も少数見られるなど、実に表現の多様さに富んでいることがわかる。

このように、「千～・万～」の涙の表現は、数字そのものが表すように普通あり得ないことを文学的に修辞したものなのである。

4. おわりに

涙の表現にしぼっていえば、近代の文学は涙の文学ではないかと思われるほど表現の多様性が見られた。近代(特に明治期)の作家は、「涙」を作品の主眼とするほどにより素材としていた。本稿では、色々な涙の表現のうち数字との組み合わせた表現を中心にして、どのような表現が用いられていたのかを考察した。

まず、数字「一」と少数を表す数字に関して言うと、主に副詞として用いられている「一杯の涙」や「一滴の涙」、「一零の涙」が代表的な例であった。「～行の涙」も比較的多く用いられている。特異なことは、たとえば「一滴の涙」とか「涙一滴」のように大部分が「一滴」の涙を流しているのに対し、「～行の涙」の場合には「一行の涙」を流すのではなく、「兩行の涙」を流していることである。これは両眼とか両頬を意識した、かなり分析的な表現だと思われる。

また、数字「一」を用いるもののうち多用されないものとしては、「一点の涙」、「一涙」、「一粒の涙」、「一片の涙」、「一条の涙」があり、また「一双の涙」「一泓の涙」のようなとても珍しい表現もある。数字「一」を用いているからといって常にごく少量の涙を流しているのかといえばそうでもない。「一掬の涙」「一升の涙」では、「掬・升」によって夥しい量の涙になってしまう。つまり、「一」を用いても十分に誇張表現ができるわけである。これに関連して言うと、大変用例が少ないが、「一陣の涙」、「一時雨の涙」、「一村雨の涙」など、激しい涙の流し方の表現もある。また、数字「一」では足りないときには、「二・両・三」や「幾・数・多」などを利用して、表現の多様性が見られた。

数字が大きくなるとどうなるのかを見ると、「十」の例はなく「百」と関連した例も微々たるものであった。大部分が「千・万」に限られている。「千・万」の数字そのものは数えきれ

ないほど多いという意味を持っていて、「涙」の表現の場合は数字そのままの意味を持っているとは言えない。「千・万」を伴う表現では「千行の涙」と「万斛の涙」という二つのタイプが主流である。「両行の涙」から見れば「千行の涙」ははるかに多く、「一升の涙」から見れば「万斛の涙」は甚だ多い。両タイプは慣用的な表現で、日常生活ではあり得ない文学的誇張表現の修辞である。「千行の涙」は日本で古い時代から用いられたものであるが、「万斛の涙」は明治期に用いられた新しい表現である。特に「万斛の涙」は、日本の代表的なおおげささの表現として人口に膾炙している。

このように、涙を流すことの形容は単純ではなくかなり複雑で、綿密であることが分かった。本稿では、近世の読本資料を少々参考にしながら近代の涙を見てきたが、近世より多様な表現が見られた。文字通り近代の文學は「涙の文學」ではないかと思われるほど多様であった。どうしてこのように多様な表現があったのか、結論を出すのは無理があるのだが、西洋文學の翻訳も一翼を担ったかも知れない。また、こういう表現が近代のみのものであるのかを判断するためには、近代以外の時代における「涙」の表現に関する詳しい研究を待たねばならない。

【参考文献】

- 佐藤 享(1981) 『泣く』の副詞的表現と歴史、『新潟大学国文学会誌』第24号、pp.20-41
 世良正利(1970) 『日本人の表情』『日本人の性格』現代心理学シリーズ2、朝倉書店、p.37
 中里理子(2004) 『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—、『上越教育大学研究紀要』第24巻、第1号、pp.304-316
 中村明(1993) 『感情表現辞典』東京堂出版、pp.186-187
 羅工洙(2011) 『近代における『紅涙』について』、『日本近代学研究』30、韓国日本近代学会、pp.5-6

논문투고일 : 2012년 06월 10일
 심사개시일 : 2012년 06월 20일
 1차 수정일 : 2012년 07월 10일
 2차 수정일 : 2012년 07월 20일
 게재확정일 : 2012년 07월 25일

〈要旨〉

近代における数字による涙の修辞

本稿では、色々な涙の表現のうち数字との組み合わせた表現を中心に、近代にはどのような表現が用いられていたのかを考察した。

数字「一」と少数を表す数字に関して言うと、主に副詞として用いられている「一杯の涙」や「一滴の涙」、「一零の涙」が代表的な例であった。また、数字「一」を用いるものうち多用されないものとしては、「一点の涙」、「一涙」、「一粒の涙」、「一片の涙」、「一条の涙」があり、また「一双の涙」「一泓の涙」のようなとても珍しい表現もある。数字「一」を用いているものなかには、「一掬の涙」「一升の涙」があり、「掬・升」によって夥しい量の涙になってしまう例もある。つまり、「一」を用いても十分に誇張表現ができるわけである。さらに、「一陣の涙」、「一時雨の涙」、「一村雨の涙」など、激しい涙の流し方の表現もある。数字「一」では足りないときには、「二・両・三」や「幾・数・多」などを利用して、表現の多様性が見られた。

数字が大きくなるとどうなるのかを見ると、「十」の例はなく「百」と関連した例も微々たるものであった。大部分が「千・万」に限られ、「千・万」の数字そのものは数えきれないほど多いという意味を持っている。「千・万」を伴う表現では「千行の涙」と「万斛の涙」という二つのタイプが主流である。「兩行の涙」から見れば「千行の涙」ははるかに多く、「一升の涙」から見れば「万斛の涙」は甚だ多い。両タイプは慣用的な表現で、日常生活ではあり得ない文学的誇張表現の修辞である。「千行の涙」は日本で古い時代から用いられたものであるが、「万斛の涙」は明治期に用いられた新しい表現である。特に「万斛の涙」は、日本の代表的なおおげささの表現として人口に膾炙している。

このように、涙を流すことの形容は単純ではなくかなり複雑で、綿密であることが分かった。本研究では、近世の読本資料を少々参考にしながら近代の涙を見てきたが、近世より多様で豊富な表現が見られた。今後の課題は、数字を伴う表現以外の「涙」の修辞はどのようなようであったのかを詳しく検討していきたい。

By the numbers rhetoric of tears in Kindai

In this paper, we mainly through the combination of numbers and representation of the expression of a variety of tears, in modern times has been discussed whether the expression was used what.

In terms of numbers representing the minority and the 「一」number, there is a typical case of 「一杯の涙」「一滴の涙」、「一零の涙」. Some of what you are using the 「一」numbers, in some cases there is a 「一掬の涙」「一升の涙」 of a bushel, it becomes a tremendous amount of tears. In other words, it is not enough superlatives can be used 「一」.

Looking at what will happen if the larger the number, the case of the 「十」 is not insignificant was also associated with the case of 「百」. Mostly limited to 「千・万」, but has a large enough number itself means the 「千・万」 is uncountable. Representation with a two types of 「千行の涙」 and 「万斛の涙」 is mainstream. Both types in idiomatic expressions, which is the literary rhetoric of exaggeration in everyday life is impossible.